

# 照葉樹林だより

綾の森を世界遺産にする会 会報

第3号

2006年4月10日

## 日本の綾から世界の綾へ

綾の森を世界遺産にする会 副代表 日高 晃

仕事の関係でスイスをはじめ、年4~6回ほど海外へ出かけます。そうすると海外のアーティスト、ビジネスの関係者等々、宮崎に来てくれるようになり、交流が盛んになってきます。そのときは、必ず、宮崎の奥座敷「綾」へお連れして森を散策したり、友人を訪ねて楽しいひとときをともに過ごすことにしています。本物の自然に触れて心が和んでいき、そこに暮らしている人の「眼鏡」を借りてのぞいて見ると、改めて「綾」の文化的側面を発見することができ、「えー、ここって、みやざき？」と感激してくれます。

2002年春に、開催された「照葉樹林文化シンポジウム」の実行委員より、4月にスイスに行くにあたり、世界各地で森林保護活動等を支援しているところよりメッセージなどをもらえないかと依頼されました。そこで、スイスでコンタクトを取り、オーデマ・ピゲ社（時計メーカー）およびオーデマ・ピゲ財団の会長であ

るジャスミン・オーデマ女史と面会してお願いしました。日本の原風景だった照葉樹林が今では3%しか残ってなく、その中で最大の綾の森を守り、自然の生態系の素晴らしさをまちづくりに生かした郷田前町長の偉業を伝え、この貴重な森の保護とそこから派生した文化を子々孫々へと伝えていきたい、そのための7月20日のイベント「親子ふれあい体験！てるはの森へ」・・・と述べるとすぐさま手帳を広げ、秘書を呼ばれ「7月のそのイベントに参加する」と返事いただいたのは、



本当にびっくりさせられました。オーデマ・ピゲ財団の設立10周年を記念し、日本において初めての支援でもある「綾のてるはの森」を決定してくれたのです。

帰国後、上野登先生（宮崎大学名誉教授）にそのことを報告すると同時に「照葉樹林文化シンポジウム」実行委員会が母体となり、県内の市民活動団体、ボランティア団体および個人が一同に会して、6月に「宮崎照葉樹林ネットワーク」が設立されました。森から人へ、人から森へと活動の輪が全国・海外へとネットワークとして広がりました。

「親子ふれあい体験！てるはの森」は、参加者はもとより、マスコミ、そしてゲストとして参加されたジャスミン・オーデマ女史の評価も高く、大成功を収めました。

自然は、子どもたちにいろんなことを教えてくれました。美しい豊かな自然を保護し、私たちを取巻く自然環境の重要

さを未来の子どもたちへ伝えていくのは、私たち大人の責任です。

そこからまた、綾の森を世界遺産にする新たな運動が始まりました。（㈱日高本店 代表取締役社長）

参考：オーデマ・ピゲ財団は、スイスの法律に基づいて設立された非営利団体で、特定の森林保護プロジェクトに必要な資金を提供することを目的としています。そしてそれらの支援は、IUCN（国際自然保護連合）からの専門的な助言を受けることになっています。

# 照葉樹林とはどんな森？

綾の照葉樹林プロジェクト検討委員会 委員 河野 耕三

最近でこそ「照葉樹や照葉樹林」と言う言葉が一般化してきたかに見えますが、言葉の意味や言葉の持っている概念まで理解している人はまだ多くない状況です。そこで、あらためて照葉樹林の言葉の由来や特徴、そしてどのような環境要因下に成立しているのか等について紹介したいと思います。

まずは**言葉の由来**ですが、用語の語源は Brockmann Jerosch と Rubel (1912) が群系クラス(針葉樹林とか湿地草原とか類似の景観で植生を大区分するときの単位)の分類に使ったのが始まりのようです。世界の植生を森林(Lignosa)・草原(Prata)・砂漠(Deserta)他に分け、更に森林を細区分しました。その一つに熱帯多雨地域や地中海地域のタイプと異なる常緑広葉樹林としてカナリア諸島に見られるゲッケイジュ属(Laurus)タイプの森林(Laurilignosa および Laurisilvae)を区別しました。カナリア諸島の森林には幾つかのクスノキ科の仲間が見られます。その後、このようなクスノキ科の植物を幾つか含む森林のタイプは東アジアまで広く分布していることが分かってきました。このことから、中野治房(1930)が他の常緑広葉樹林と区別するため、テカテカと光るクチクラ層の発達した葉を持つ樹種が多いことに注目して「照葉樹林」として意識をしました。日本人ならではの高い感性・深い観察力に基づくすばらしい訳だと思えます。

しかし、その後照葉樹林という言葉は植物学や生態学の分野の学術用語としては使われるようにはなりませんが、一般化することはほとんどありませんでした。一般化のきっかけとなったのは上山春平編の書籍だったような気がします。1969(昭和44)版の中公新書『照葉樹林文化』です。その後1976(昭和51)には『続・照葉樹林文化』が出

版され、幾つかの照葉樹林文化と絡んだ書物が出されるようになりました。上山春平・中尾佐助・佐々木高明といった京都大学派と言われる先生たちによって提案された日本文化論としての「照葉樹林文化」の概念は、その後マスメディアの関心もあって広く一般に流されるようになりました。

ところで、照葉樹林の語源(Laurilignosa)と日本で意識された照葉樹林とは微妙なずれがあります。これは、世界の森林を論じる時の認識・概念の違いとして生じます。例えば日本では「照葉樹林は日本を含めた東アジア一帯に広がる」と説明され理解していますので、中国の森を見て「なるほど綾の森と同じ照葉樹林」と認識します。しかし同じ森を見た中国の人は、「常緑広葉樹林」もしくは「亜熱帯雨林」としてしか認識していません。こうした食い違いは日本で意識された照葉樹林の概念や定義が国際的に一般化していないこと、その結果適切な英訳等が定まっていないことに因ります。現在一般に使われている照葉樹林の英訳は evergreen broad-leaved forest, subtropical rain forest, warm temperate rain forest 等々です。これらの言葉の中には「テカテカ光る葉」を意味するものではありません。そこで近年では学会や論文等で発表するとき今西・吉良(1953)が提案した lucidophyllous (lucidophyll) forest を使用する人が多くなってきています。混乱を防ぐためにも、英訳の統一と普及は必要だと思います。

次に**照葉樹の形態及び照葉樹林の特徴**について触れてみたいと思います。

植物は動物のように移動できません。発芽した所・環境で生き抜くしかないので。特徴ある自然環境の中で一生を全うするにはその環境にあった生理・形態・生態面での対応・適応が迫られます。その結果、植物の科・属・種の区別無く生育立地の環境全般に対する対応・適応の類似性が生

じてきます。環境との関係で世界の常緑広葉樹林を、主に生活形や森林構成の特徴で概略的にまとめてみると次のようになります。

a 熱帯降雨林

- 1 優占種の樹高はおよそ 40～70m。木本層は突出樹高が目立つ多層階層。優占種に幹が長くてスマートなものが目立つ他、クワ科イチジク属の絞め殺し木も目につく。
- 2 地上・着生・地表植物が中心で、大型木本蔓植物が多い。
- 3 幹生花・板根・水切りを葉の先端に持つものが多い。
- 4 クチクラ層は発達せず、葉面は平滑で無毛、大型の葉を持ち、芽鱗や包が未発達のものが多い(写真上)。
- 5 種多様性が極めて高く、優占種がはっきりしない。

b 照葉樹林

- 1 優占種の樹高はおよそ 20～30m。木本層は3～4階層で凹凸密閉樹冠。優占種の幹は比較的スマートなものが多い。
- 2 地上植物の絶対優位の関係が崩れ、地表植物が多くなる。大型木本蔓植物は少なくなる。
- 3 幹生花、板根は殆ど見られず、水切りの尖りもはっきりしないものが多い。
- 4 クチクラ層が発達し、革質で光沢があり、多くの場合鋸歯がないか少ない葉を持つ樹種が多い。また、無毛で中形葉で、芽鱗や包を持つものが多い(写真左下)。
- 5 種多様性が薄らぎ、優占種がはっきりする。

c 硬葉樹林

- 1 樹高は 15～20m。木本層の階層は多くは1層で、瘤状樹冠を形成する。優占している樹木の多くは下部より分枝したり屈曲したりするものが多い。
- 2 地表植物・半地中植物・地中植物が多くなる。木本蔓植物は少なくなり、草本蔓植物が多くなる。
- 3 地下部の割合が高く樹皮のコルク層が発達する。
- 4 クチクラ層が発達し、革質で硬くて厚くとげ状鋸歯を持ち、葉裏に絨毛などの毛が多く、蠟やワックス成分を分泌し、耐乾機能を高めた小形葉のものが多い(写真右下)。
- 5 種多様性は低く、乾性草原の種が多くなる。優占種ははっきりする。

最後に、森林が上記のような特徴を持つようになった背景にある環境条件について、簡潔に触れてみたいと思います。

植物の生育に必要な基本的自然環境は温度(気温)と水(降水量)と光です。中でも地域によって変化の大きい気温と降水量は、地球上の植物の生育と分布にとって大きな制限要因となっています。降水量に気温が影響することによって樹木や森林の種類・タイプの違いが創り出されます(図1)。図を見ると照葉樹林は気温・降水量の条件が



インドゴム、クスノキ、ウバメガシの葉と芽  
(上:全体 下左:芽 下右:葉先)

ら最も中庸な気候域に成立する森林と出ることが出来ます。生理・形態面からは、熱帯多雨林から次第に厳しい環境に適応してきた森林が、ある程度の耐寒機能と耐乾機能を獲得した植物によって構成された森林、それが照葉樹林と言えます。

ちなみに照葉樹が生育できる最寒月平均気温は 0～-1 と言われます。また暖かさの指数(植物の生長に必要な最低限の気温を平均的に 5 と想定して、各月の平均気温の 5 以上の部分を 12ヶ月分合計したもの)では 85 以上の範囲に照葉樹林が成立しています。180 以上になるとガジュマルやアコウ・ヘゴなどの熱帯系と類縁関係を強める植物が見られるようになり、気候帯や種構成上からは亜熱帯として区別されます。ですから、私たちが日頃照葉樹林と言っているのは暖かさの指数が 85～180 の間に成立している常緑広葉樹林を指していることが多いのです。日本では鹿児島県大隅・薩摩半島を南限とし、太平洋側の岩手県南部海岸、日本海側の秋田県南部海岸付近を北限とする範囲です。しかし、一般的には前述したとおり熱帯から亜寒帯まで森林が連続している東アジアでは気温だけでは区切りにくく、生活形や森林相観に重きを置いた考えで、亜熱帯の一部まで含ませる場合が多いのです。世界的に見ても、同様な特徴を持った森林は島嶼的に分布していて、その森林を照葉樹林に含めるかどうか意見が分かれています。いずれにせよ、国際的に照葉樹林(lucidophyllous forest)を論じるときには、その定義・認識に係わる混乱がしばらく続きそうな気がします。(日本生態学会会員)

# 「てるはの森の会」事務局から

「綾の照葉樹林プロジェクト」の動き

～普及・啓発活動～

綾の照葉樹林プロジェクト発足記念  
特別講演会

「多事争論～照葉樹林をめぐる～」

(2006年2月5日 綾町公民館文化ホール)

TBSテレビ「NEWS23」でお馴染みの筑紫哲也さんをお招きし、プロジェクトの発足記念講演会を開催しました。(参加者数 約700名)

<第1部>

プロジェクト概要説明

九州森林管理局・てるはの森の会

基調講演「多事争論～照葉樹林をめぐる～」

講師：筑紫哲也氏

「対立関係に立つことが多い官と民と一緒に活動することは画期的で意義深い」とプロジェクトを評価され、「経済性、地域活性、観光面から考えると、綾の森には潜在的な需要がある。それをどう掘り起こしていくかはこれからの人間の努力にある」と、今後の活動に対する激励をいただきました。



<第2部>

トークライブ

綾の森にそれぞれの立場で関わる3名：山田壽夫氏（九州森林管理局長）、河野耕三氏（日本生態学会会員）、郷田美紀子氏（綾の森を世界遺産にする会副代表）が、筑紫さん自らの進行のもと、綾の森や今後の展開について語り合いました。郷田さんが「本当に自然を愛し次代に伝える思いが同じなら、誰とでも手をつなぎ一緒にやれる」と述べたのに対し、筑紫さんも「プロジェクトの成否は互いにどれくらい言い合えるか。楽しい議論が結果を生む」と指摘されました。

この講演会の模様（一部）は、「NEWS23 ホームページ」(<http://www.tbs.co.jp/news23/>)の「多事争論」ページでご覧になれます。

～会議の開催～

第3回連携会議の開催（2006年3月14日）

平成17年度事業の取組み状況報告と、平成18年度の事業方針について審議し、承認されました。

来年度は、森林生態系保護地域の新設検討、見本林の整備、綾川上流緑の回廊モニタリング調査、人工林から照葉樹林への復元、環境学習事業などを実施する予定です。（平成17年度事業報告と平成18年度事業計画は、次回の連携会議後に会員の皆様にご報告いたします）

お知らせ

「照葉樹林文化シンポジウム2006」開催  
今年は『スローライフ』をテーマに、5月13日（土）～14日（日）にかけて綾町内で開催予定です。詳細が決まり次第ご案内を差し上げます。照葉樹林が1年で最も美しく輝く季節です。多くの皆様のご来場をお待ちしております！

会員募集中！

「てるはの森の会」では、綾の照葉樹林プロジェクトにご協力いただける会員を募集しております。

年会費	個人サポート会員	2000円
	家族サポート会員	3000円
	団体サポート会員	5000円
	法人サポート会員	10000円

会員になっていただくと、照葉樹林やプロジェクトに関する情報を掲載した「照葉樹林だより」を年4回お届けします。プロジェクトが実施するイベントや各種行事に参加できます。詳細は下記事務局までお気軽にお問合せください。

綾の森を世界遺産にする会 会報  
第3号 2006年4月10日  
発行：綾の森を世界遺産にする会  
事務局：てるはの森の会  
〒880-0014 宮崎県宮崎市鶴島2丁目9-6 みやざき  
NPOハウス403号  
TEL 0985-35-7288 / FAX 0985-35-7289  
E-mail: [teruha@miyazaki-catv.ne.jp](mailto:teruha@miyazaki-catv.ne.jp)  
URL: <http://www.teruhanomori.com>

(表紙の写真「ヒサカキの花」撮影 坂元守雄)